

# 大通公園を望む窓辺から

## 高次脳機能障害

常任理事 生駒 一憲

高次脳機能障害という言葉に馴染みのない先生方が多いのではないだろうか。少しでもこの理解を深めていただけるよう、今回はこの話をしたい。

高次脳機能障害のうち、脳卒中などの限局性の病巣で起こりやすい失語、失行、失認は以前から医療の対象として認識されていた。一方、脳外傷などの広範囲の脳損傷で起こりやすい記憶障害、注意障害、遂行機能障害、社会的行動障害は若年者に多く、社会復帰が損なわれるにもかかわらず、必要な医療や支援がなされていなかった。このことを踏まえ、国は、平成13～17年度に12の地方自治体（または自治体連合）が参加する高次脳機能障害支援モデル事業を行った。当地では、北海道と札幌市が自治体連合として加わっている。このモデル事業では、最初の3年間に、診断基準、訓練プログラム、支援プログラムが提唱され、後の2年間ではそのプログラムが検証された。その後、平成18年からは「高次脳機能障害支援普及事業」が都道府県を実施主体として行われるようになり、途中で若干の名称変更はあったが現在まで続いている。この事業では、支援拠点機関に相談支援コーディネーターを配置し、リハビリテーションを含む医療の提供、就労・生活支援などの福祉サービスの提供や利用支援、普及・啓発活動などを行い、高次脳機能障害に関する地域支援ネットワークの充実を図っている。北海道では、同事業の名称を「高次脳機能障がい者支援事業」とし、道内の保健所を相談窓口として事業展開をしている。

平成30年4月からの第7次医療計画では、整備する医療提供体制の一つとして、新規に高次脳機能障害が挙げられている。今後、高次脳機能障害の認知度がさらに上がり、多くの医療機関で診療が行われ、高次脳機能障害者の社会復帰がさらに進むことを期待したい。



## 蝶の話

常任理事 笹本 洋一

札幌市南区の住宅地のはずれに暮らすようになって、40年近くになる。もともと狸小路の裏手に住んでいたので、救急車、消防車のサイレンや、自動車の騒音、雜踏の騒がしさは物心がついた時から当然であった。住宅地の夜間の静寂に少なからず驚いたものである。

春は蝶の乱舞、夏はセミの声、秋はトンボの大群が見られた。いつの間にか家の中でコオロギが鳴いて、びっくりしたこともある。庭の木にモンシロチョウが住み着いて、花が咲いたようにモンシロチョウの大群が群がり、困ったこともあった。

この数年、蝶を見る機会が減ったような気がする。空き地に家が立ち並び、緑が減っていく都市化が進んだといえばそれまでかもしれないが、たまに単独で飛ぶ蝶を見るくらいである。

気象庁は毎年、生物季節観測累年表を発表していることを知った。1953年から日本各地のモンシロチョウの初見日を調べている。気象台の構内で初めて観測された日のことである。1953年から2000年までの48年間で、札幌市気象台でモンシロチョウが見られなかつたのは、2回しかなかつた。2001年から2013年までの13年間では9回も見られなかつた。9年間、気象台にモンシロチョウが現れなかつたのである。2014年以降は、毎年観測されている。因みに東京の気象台では、1953年以降一度も観測されていない。モンシロチョウの減少には、都市化の影響が大きいようだ。

国内のモンシロチョウは年に4～5回も発生するそうである。北海道は涼しいためか、2回程度だそうだ。温暖化で発生回数も増えそうだが、激しい気候変動がモンシロチョウなどの発生に悪影響を及ぼしているという報告もあるそうだ。

孫たちが蝶を追いかける姿は、ほほえましいものである。気づいた時には手遅れにならないように、日常的に周囲のわずかな変化にも敏感でありたい。